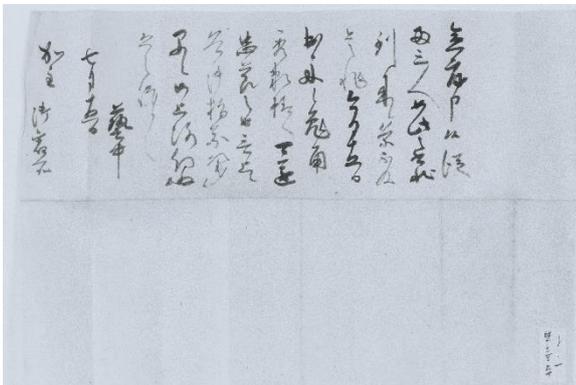


関ヶ原合戦と肥後

慶長5年(1600)9月15日に関ヶ原合戦が戦われていた頃、肥後でも東軍と西軍の戦いがくりひろげられていました。当時、肥後には、加藤清正(熊本城主)、小西行長(宇土城主)、相良頼房(人吉城主)の三人の大名がいました。小西行長は西軍(石田三成方)として関ヶ原合戦に出陣。相良頼房も西軍方として岐阜大垣城を守りました。これに対し加藤清正は、東軍(徳川家康)に味方し、小西行長の所領を攻めました。このため、八代を含む小西領では戦いが勃発することになったのです。

① 毛利輝元書状写 松井文庫所蔵



西軍大将からの勧誘状

加藤清正宛 慶長5年(1600)7月15日

毛利輝元が加藤清正に送った書状の写です。輝元は安芸・周防・長門・石見など中国7カ国を支配する大大名で、関ヶ原合戦では西軍の大將をつとめました。この書状は、加藤清正を西軍に勧誘するため書かれたものです。「豊臣秀頼(秀吉の遺児)に忠節を尽くすため、早々に大坂に上り、西軍に加わるべきだ」と記されています。この書状をもらった清正は、その写を作成し、西軍に寝返らない証として、東軍方(家康方)の武將で、豊後木付(大分県杵築市)を守っていた松井康之に渡しました。本状が松井家に伝来したのはそのためです。

② 加藤清正書状 松井文庫所蔵



豊後木付への援軍を約束する

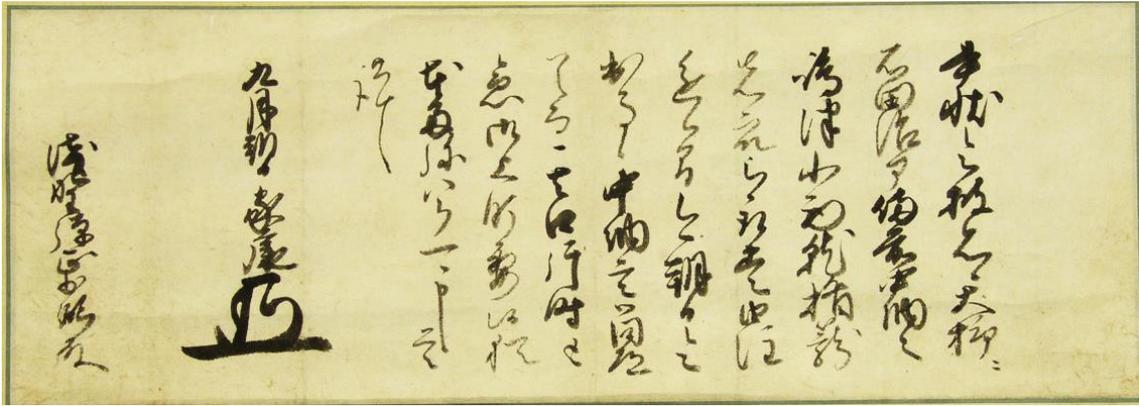
松井康之・有吉四郎右衛門宛

慶長5年(1600)8月29日

加藤清正が細川家臣で豊後木付(大分県杵築市)を守る松井康之と有吉四郎右衛門に送った書状。木付は細川忠興(丹後宮津城主)の飛び地でしたが、忠興は細川軍の主力を率いて関ヶ原に出陣しており、木付の守りは手うすでした。このため清正は、同じ東軍として、木付の細川軍に援軍を約束しました。書中には、「もし、西軍が木付に攻めてきたならば、熊本を捨ててでも、援軍にかけつける」と記されています。

③ 徳川家康書状 八代市立博物館所蔵 浅野長政宛 慶長5年9月1日

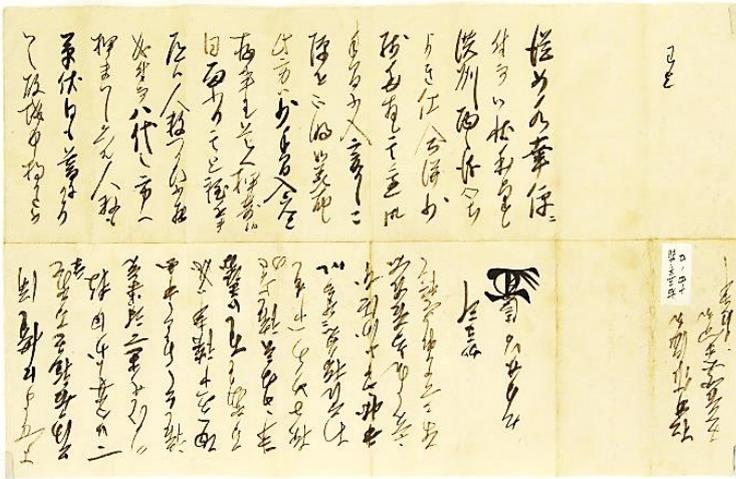
おもな敵として小西行長の名前をあげる



家康が東軍の武将浅野長政に送った書状で、関ヶ原合戦の2週間前に発せられたもの。西軍の拠点である美濃大垣城（岐阜県大垣市）を東軍の先鋒が包囲したこと、これを受け家康が江戸を出馬したことを伝えています。本状には、大垣城に立て籠もる西軍武将の名前が記されています。その中に小西行長（肥後宇土城主）の名前がみえることから、家康が行長を西軍の主要メンバーと認識していたことがわかります。

④ 加藤清正書状 松井文庫所蔵 松井康之・有吉四郎右衛門宛 慶長5年(1600)9月28日

宇土城攻めの状況を知らせる

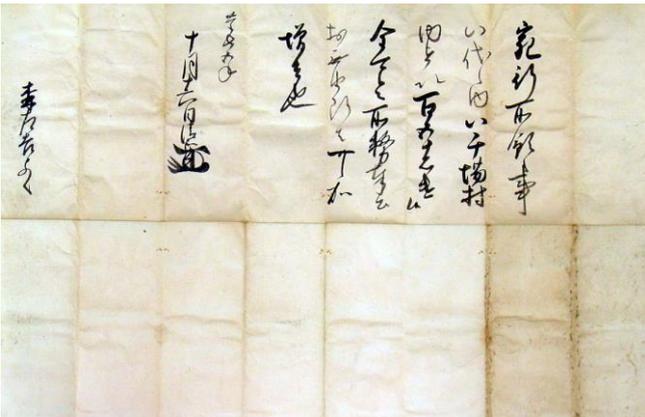


加藤清正が松井康之と有吉四郎右衛門に送った書状で、宇土城攻めの状況を知らせたもの。宇土城は小西行長の居城でしたが、行長が西軍として関ヶ原合戦に出陣すると、清正是小西領に侵攻し宇土城を包囲しました。書中には、城攻めに手こずり落城まで少し時間がかかること、八代にも軍勢を送ったことが記されています。

宇土・八代城の小西家臣は、加藤軍の攻撃をよく防ぎましたが、最後は清正の降伏勧告に応じ、10月中旬、城を明け渡しました。

⑤加藤清正知行宛行状 八代市立博物館所蔵 森左吉宛 慶長5年(1600)10月16日

小西家臣に領地を与える



加藤清正が宇土・八代に侵攻してくると、小西家臣のなかには清正在に味方する者がいました。森左吉もそのような家臣の一人で、清正在に味方することで、領地を確保しました。

本状は八代が落城する前日、清正が森左吉に対し発給したもの。八代郡八千場（八千把）村のうち150石の領地を与えると記されています。